閲覧許可証

A-(7)

プロレタリア通信

'69.9.17.

共産主義者同盟
政治局

(1)全都合同会議(地区代 学細代)開催について

全都の同志諸君!　10~11月闘争と目前にして今こそ全同盟の強固な意志一致が要求されている。反党分子赤軍派の策動によって同盟は一時的混乱と未議なくされた。

一政治局は現局面の混乱を止揚するために、立場の基準の確立。

二、更に、この間、機能が部分的に弱化している各級機関の正規の活動復活。

三、10~11月の基本方針の確定にもとづく7~8月闘争の当面の任務方針とスケジュールの決定。

以上ら点のすみやかな実行のために政治局は10月0日0時、場所XXに、全都の地区代、学細代(支部代)の合同会議を招集するへ日時、場所については、配布をうけたものから聞くこと)

(2)反同盟解体分子「赤軍派」の動向と問題の基本的組織対応について

全国の同志諸君!　70年安保闘争の当面する政治闘争焦点10~11月闘争を目前にして、わが同盟は方針、且つ、組織上の重大な問題に直面している。問題の核心は、10~11月方針と全同盟的に強固な意志一致と勝ち取り、所謂帝国主義内部のなし崩しファシズム攻撃をハネ返して打倒する秋の安保決戦を、継続的中央確力武装闘争として闘い、党の突撃隊の武装闘争の開始とマッセンストの計画的実出によって70年闘争の革命的高揚を、プロレタリアヘゲモニーのもとに主体的に勝ち取り、世界革命戦争への突破口を切り開き、継続的武装闘争を発展させうる党、非合法の党へと同盟を飛躍させることにある。だが同盟が直面する重大な政治闘争課題に対し、正規の党組織機関を通した討論で、全同盟の強固な意志一致を勝ち取るのではなく、あべこべに全同盟の強固な意志一致を破壊する分派を形成し、六〇年安保以降の闘いを通して築き上げた、わが共産主義者同盟を解体し別党=共産党を六月二十五日に結成せんとした反党分子が発生した。

彼らは「10月武装闘蜂起」=「臨時革命政府の樹立」のマンガ的主張を空文句的に主張し、ホブル急進主義の危機感情に訴えて分派を形成し、現実の党機関活動を離れ医科歯科大の研修医ルームに、同盟に敵対して集喰い反同盟・別党活動を進めてきた。同盟中央は彼らの正規の機関活動に於いて自己の政治主張を貫徹するために多数派工作を展開するのであれば正規の機関討論を通して党全員に彼らのルンプロ・クーデター路線を粉砕したであろう。現に継続三中委にありては意見書の提出を求め、その内容の全国配布を確認し、討論の自由、同盟内政治主張の自由を保証して

きた。

しかし「赤軍派」指導部にとっては、最早や女産主義者同盟の正規の機関活動や全同盟の強固な意志統一は必要ではなく、正に別党コース女産党結成大会をわが同盟に敵対して対置し、党内クーデターで同盟解体を行うことが目的となった。従って赤軍派は、同盟内の一潮流として政治主張ともうしものが、正規の機関で多数を獲得することを目的としたフラクではない。独自の機関メンバーをつくり、独自の組織内通達を発行し、わが同盟を解体し、クーデターによって共産党をつくる分派である。その証拠に、彼らは同盟中央で組織活動基準が討議され、近日中に結成される同盟内突撃隊の結成大会に対し、赤軍派のみで勝手に六月二十三日に突撃隊の結成「大会」を行い、しかも同盟の正式の突撃隊のごとく宣伝し、曰く、同盟中央が、突撃隊結成に反対しているかのごとくデマをでっちあげている。これらの事態を許したのは一方における軍事問題の一切の統轄者たる軍事委員長の無活動による政治指導機能の無力化にあり、従って同盟政治局は軍事委員長の指導と責任を果たされていないことを確認し突撃隊の結成を当面の緊急課題とする軍事委員会の指導統轄機能を同盟中央書記局におき、指導責任を在々木書記長があたることに決定、ただちに同盟の突撃隊を結成することを同時に決定、しました。

政治局が同盟内組織指導ビルの原則においても、10・11日の中央権力武装闘争大会の問題においても、赤軍派に対して断固たる原則的立場をつらぬいて彼らの無原則的解党的反党的組織方針とクーデター路線と対決するや、政治路線においてはクーデター武装蜂起＝権力奪取をあいまいにさせ、組織路線においても「女産党結成をやるなどとえったことはない。全くの誤解であり、分派ではない」などと東京の各地区や対学同各支部へ弁解に廻っている。

全国の同志諸君。冷静に赤軍派指導部の反党的別党コース計画を見抜き、彼らの追いつめられたが故の自己弁護のマヌーバーを見破って粉砕しなければいけない。

政治路線上においても赤軍派指導部は臨時革命政府計画や運搬すべき閣僚名簿作成「革命政府」のメンバー選定などとマニアティックにみがかれながらも一方では「これはどうでも良い。要するに武装蜂起だ」と口走るなど、彼らの「現代革命論」は一発屋的情念と政治の言葉で粉飾した典型的ルンプロ・クーデター論でしかない。

全国の同志諸君。我々はあくまでもルンプロ・クーデター論を粉砕し、反党分派を解体しなければならない。

全国の同志諸君があくまでも冷静に、事態を正確に判断し反党分派を粉砕するために「赤軍派通達」なるものの実体を知らせておこう（「赤軍派通達」6月12日号）。

目次は「(1)武装蜂起の準備を更に打ち固めよ。(2)女産党を建設し計画的に党内闘争を勝利せよ。(3)第9回大会と我々の基本的

対応・(四)当面の任務とスケジュール」となっている。そして前文で「女産同の前進と赤軍派を軸とする女産党への革命的再編がきわめて近い将来の問題として日程に上った」と述べ更に「我々自身、過去それが党内党という規定を行いつつも、今だ濃厚に左派的性質を残していたのに対して、我々自身の政治組織綱領を踏まえつつ、女産党への質的な飛躍を実現せねばならない事業である」と言い切っている。すなわち彼等は党内党という規定を自己に行い、それを更に女産党へ飛躍させるという云うのである。そして彼らは「女産党へメンバーを解体再編することを推進しなければならない」と再確認し赤軍派と党に直接させるために「総合指導部を強化せよ。事務的スタッフ　連絡　機関紙誌を確立せよ。機関紙を発行せよ。各級の中央人民組織要　(四)軍機関」と通達している。

彼らは同盟機関紙「成旗」に対抗し、赤軍派女産党の機関紙を発行する計画を明確に通達したのである。

そして「左中、関西、全国の上下四別々の解体結集」(傍点は原文)これが彼らの全国通達の組織路線であるが彼らが追いつめられた現在、ハヤにタに向ってマヌーバーを使い自己の陰謀をぬぐおうとしても　彼らの通達は白日のもとにさらされており　しかも彼らが6月25日の女産党結成大会への参加を同盟員に対してオルグしたが安全に失敗している事実をぬぐいさることはできない。

全国の同志諸君。女産主義者同盟の更に一層の革命党への飛躍を勝ちとり、空論的革命論を粉砕し　10・11月で、武装連続中央権力闘争を貫徹し、発展させうる党、文字通り非合法の党体制を確立しよう。同盟中央は、佐々木同志を权力から奪還し、書記長中心の組織体制を確立した。

政治局は現在の赤軍派の策動の質が、党内における政治主張貫徹のための正規の党内闘争ではなく、あきらかに、わが同盟の組織原則を一切無視し、これに敵対する分派活動であることを確認し、彼らに対する分派の解体と自己批判を要求し　その指導部に対してはその責任を追究することを決意した。

全国の同志諸君。同盟の下に結集し　反党分派赤軍派粉砕の断固たる闘いに決起せよ。

全同盟の固い意志一致の下に断固として10・11月安保決戦武装中央連続闘争を闘い抜き、日帝打倒。世界革命戦争への突破口を切り開こう。

(3) 労働者組織委員会・地区代議会議の報告

全国の同志諸君！　前回プロ通0号にも報告した様にこの間カ（6、8ASPAC斗争以降）同盟内に於ける組織的混乱と同盟解体の陰謀という組織行為に対し、現在P、Bを筆頭に全ゆる条件の下で徹底的に粉砕する隊列なるものが展開されている。その一つは5、23労働者組織委員会と地区代議会議の開かれた状況、現在の階級攻防関係の中で権力と党の失敗に対決局面としてある破防法攻撃の中での同盟、就中PBの半非合法(地)活動という、おかれた状況下での困難性、そして組織が非合法にならざるを得ない組織としての密集基軸が政治局決定政治指針のもとでの活動の一致に求められる時に一部の右翼主義、主観主義の集団のPB不信任ヒ(見)ー確認としては改組・プロ通0号の否定、同盟内に於ける意見の不一致の現状と独自の分派活動の承認という非合法下の政治結集＝同盟強化と組織活動とは逆の反同盟的策動の一時的成功を許すという事態を生んだ。同盟中央はプロ通0号にも提起したが現局面に於ける階級対時状況の質と同盟の位置＝秋の安保決戦へ向けて同盟が何を、どのようにやり抜くのか、その事は同盟組織にとって如何なる点検と克服を通した飛躍を要求しているのかの確定と現在までの同盟活動の総括・就中4・28斗争の総括（この点に関しては すでに機関紙上であきらかにした）＝階級対決 共闘発展成熟の条件に規定された）の極限反撃としての街頭戦に於ける軍事の問題、斗争総括を一般的に軍事のみに短絡させる思考について全く論外であるがしをそのものとしてわが同盟が明きらかにするのかが向けられている我々が軍事を問題とする所の党非合法攻撃に対応した活動の保証＝非合法体制の確立③党の階級斗争の攻防局面にホーハイとして登場する大衆の自然発生性の質＝反、反革命、反帝国主義的再編、反政府、意志を持った実力斗争のエスカレート＝権力斗争への飛躍の鍵は何か、その任務を担う同盟の政治路線と理論に武装された同盟中央指部の実践隊の建設、③部分的・一時的戦術局面に於ける軍事的勝利、北と政治的勝利の結合し関係、いうならば現代革命に於ける革命形態＝秋の決戦と秋以降の予見、④武器、という問題についての不充分性を残しており、より実践的な面からと同時に現代帝国主義段階に於ける危機の発現形態が不可避とするとこうの階級攻防の対峙とその尖鋭化の焦点としてアジア危機と日本帝国主義＝日米反革命同盟の強化＝沖縄前線基地化＝帝国主義的社会的再編としてある「ポ」五安保に対しわが同盟が如何に対決しめくのか、その突破の階級関係に於ける局面打開は如何なる質と戦略を切り開くのか、いうならば70年安保＝秋の決戦＝中央権力闘争の連続とマッセンストライキの実践化の革命論的位置と現状況の階級攻防の質と秋の決戦の政治的性格とわが同盟としての党的強化階級闘争の尖端部を担い切る党、党独自の突破口の強固

かつ強大な部隊の建設を鮮明にすることこそが求められている。かかる立場を堅持するが故に6/23地区代における確認（確認と称されているが）がその内容のもたらす組織の解体の危険という面から同盟中央は6/5政治局の責任招集による労働者組織委と地区代合同会議を開き、混乱止揚の方向性を結集した地区代表者の全員が、組織内における反同盟、反階級的活動に対する対応の甘さと提起されている問題の質に対する革命主体確立上の認識の弱さを含めた自己批判的総括を通し全員一致確認した。会議は同盟議長と組織委員会キャップ×同志両名の議長団により運営され、首都における地区代（欠席3）全員の結集をもってかちとられた。確認された内容は既に「赤軍通達」を発行し「ブントの解体、共産党の結成」という組織路線を確立し、その路線に立って活動を開始している部分が「P・Bの改組」を提起し、同盟中央を批判、糾弾、中傷する事は仮りに批判摘に一定の評価すべきものがあったとしても、その意図は明確に組織混乱解体を目標としているものであり、かかる行動を通して「共産党」の別党コースを有利にもちこもうとする反同盟的活動である事は論をまたない。いうならば組織を否定し組織の外に立った人間には、組織の一員という仮面のもとに一切の組織活動を行う権利は失われたのであり、かかる部分の組織撹乱活動に一時でも同調した事は、その根本は同盟中央の政治指導の問題であると共に、党内闘争、党派闘争に対する態度として自己批判されなければならない。同盟中央ならびに地区代表者全員と同志は プロ通○号で同盟中央から提起された「……焦眉の課題」を出発点とし安保決戦・69年秋へ向けて強固な党、同盟中央直轄の突撃隊の早急なる建設を確認し、その密集した組織の力と同盟政治方針の確立をもって主観主義、空論主義反同盟分子を弾劾し、世界革命戦争へと連続飛躍させる「中央権力闘争による佐藤帝国主義政府実力打倒」を「武装闘争」の質とその実体化を自らの責任に於いて準備形成し抜かなければならないことを確認した。反党分子その同調者に対する同盟中央の態度は次の通り確認された。「赤軍派」の主要分子として明らかにされている者については直ちに自らの立場を反省、自己批判を要求する。その上で全同盟の討議の結集組織処分を行う、その他については基本的に内容討論を組織し粉砕し、この面の活動に対する自己批判を要求し、自己批判が行われない場合は組織的処分を行う。我が同盟内部から「赤軍派」の一切の活動を払拭し、且つ、自己批判が原則的に確認されない段階での「赤軍派」「その同調者」の我が同盟内での活動は一切認められないし、組織決定を無視した活動がなされた場合には物理的にも粉砕されなければならない。

尚、組織委員会キャップ。×同志は、この面の組織委員会指導に於ける責任をとり、自己批判し、辞任を表明。なお、×同志は、自己が「赤軍派」に所属していないことを再三表明し、一同盟員として今后も同盟活動に積極的に加わる旨、意志表示した。